

Title	平成21年度若手研究成果報告会 (2月1-2日 三田キャンパス北館大会議室)
Sub Title	Annual meeting for oral presentation of young researchers
Author	辻井, 岳雄(Tsujii, Takeo) 星, 聖子(Hoshi, Seiko)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2010
Jtitle	Newsletter Vol.12, (2010. 6) ,p.3- 3
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000012-0030

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

平成 21 年度若手研究成果報告会

Annual Meeting for Oral Presentation of Young Researchers

(2月1—2日三田キャンパス北館大会議室)

平成 21 年度の若手研究成果報告会が、2月1・2日の2日間にわたって三田キャンパス北館大会議室にて行われた。この報告会は、本研究拠点の特別研究教員、非常勤研究員らが研究成果を各 20 分間(発表 15 分、質疑応答 5 分)の持ち時間で口頭発表するというものである。初日は主に脳と進化班と遺伝と発達班に所属する若手研究者が 3 つのセッションに分かれて最新の成果を報告した。

第 1 セッションは動物実験による比較認知研究が主要なテーマで、石井拓(以下、敬称略)がコモンマーマモセットにおけるシヨ糖溶液消費量の価格弾力性、山崎由美子がニホンザルの道具使用獲得にともなう行動型の変化、加藤真樹がコモンマーマモセット脳における言語関連遺伝子の発現解析、伊澤栄一がカラスにおける優劣関係維持に関わる神経回路の探索に関する成果報告を行った。第 1 セッションの座長は、脳と進化班の伊澤栄一が行った。

第 2 セッションでは、機能的 MRI、近赤外分光法(NIRS)、経頭蓋磁気刺激(TMS)などヒトの脳画像研究が報告された。染谷芳明が仮名表記した文字の理解に関わる脳機能の解析、山本絵里子がバイオロジカルモーション知覚に関わる脳部位の検討、田谷文彦が学習におけるフィードバックの役割、辻井岳雄が論理的思考における下前頭前野の役割に関する成果報告を行った。第 2 セッションの座長は、脳と進化班の辻井岳雄が行った。

第 3 セッションでは、双子ラボを中心とした遺伝と発達に関する研究発表が行われた。敷島千鶴が一般知能測定のための簡易尺度開発の試み、高橋甲介が刺激間の関係学習の観点からの自閉症児支援、太田真理子が聴覚刺激に対する心臓反応と光トポグラフィ信号・脳波の関係解析、皆川泰代が GCOE 赤ちゃん・ちびっこラボにおける研究、佐治伸郎が第二言語習得における複数語彙の意味関係理解に関する研究発表を行った。第 3 セッションの座長は、遺伝と発達班の安藤寿康が行った。

2 日目、第 1 セッションでは、脳と進化班、言語と認知班および遺伝と発達班からの発表が行われた。一方井祐子は、セキセイインコの婚外交尾(EPC)をめぐる、第三者関係の理解について報告し、日根恭子は、未来を想像することが顔の再認に及ぼす影響を検討した。島田純理は、自然言語における存在文の真理条件を、「存在量化」のルベグ積分により分析し、佐々木孝子は、性同一性障害傾向に寄与する遺伝的影響の発達に伴う変化を報告した。

第 2 セッションは、論理・情報班および哲学・文化人類学班からの報告であり、植村玄輝は、フッサールが『純粹論理学のためのプロレゴメナ』(1900 年)で示した論理学概念を再検討し、串田裕彦は、論理体系「ゲーデル文の様相論理(GS)」を導入し、ゲーデル文の論理的諸性質を調査した。石田京子は、マーサ・ヌスバウムの研究を基に、政治的リベラリズムの観点から感情と法の関係を検討し、秋吉亮太は、論理学・数学の哲学に関する問題を、タイプ理論の研究(直観主義)、二

階算術の証明論(直観主義ベースの証明論)の観点で論じた。

第 3 セッションは、引き続き、哲学・文化人類学班の発表が行われ、馬場鉄兵は、哲学者ジョージ・パークリーによる懐疑論の解決を、対象物の認知に関連づけて論じた。鈴木康則は、ジャック・デリダの初期の思想におけるフッサール評価を、後の思想展開と関連づけ、検討した。モハーチ・ゲルゲイは、糖尿病患者会の活動が、社会技術的通約化(technosocial commensuration)を促し、病気のコントロールを可能にしていく様相を、星聖子は、15 世紀の教会堂装飾を例に、美術作品において論理と感性が協働している事例を報告した。

2 日間にわたる若手研究者の成果報告は、本拠点における研究が、実験科学的研究から、思想、歴史的研究に至る広範な分野にわたって行われ、「論理と感性」という観点から、ヒトの諸活動を明らかにする多様な試みが行われていることを示した。
(辻井岳雄、星聖子)

The second annual meeting for oral presentation of young researchers was held in the main conference room in North building, Mita campus, Keio University (Date: February 1st-2nd, 2010). The meeting of the first day included three sessions. In the first session, four young scientists presented their recent works about the evolutionary aspects of logic and sensibility in animal laboratories. In the second session, four scientists presented their recent works about the neural mechanisms of logic and sensibility in the human brain using fMRI, fNIRS, and rTMS. In the third session, five scientists presented their works about the genetic and developmental aspects of logic and sensibility in laboratories of twins and newborn infants. On the second day, 12 young scientists from a variety of fields such as Brain and Evolution, Genetics and Development, Language and Cognition, Logic and Informatics, and Philosophy and Cultural Anthropology reported their studies. All two days sessions demonstrated that a wide variety of researches to clarify the human activities are under investigation in CARLS in the light of 'logic' and 'sensibility'.

